

桜狩

長唄 全詞章

作詞者・作曲者・初演年不詳

のどか 長閑なる頃も如月おしなべて、柳の糸も浅緑、吉野よく見し人はいぎ、馴し東の都鳥
おほみやびと 大宮人もあこがるる、隅田河原の春景色、曙染やほのぼのと、霞か空か咲く花の、雲の中ゆく
さくらがり 桜狩

蝶鳥の羽袖も薫る花の蔭、人の心も浮き立ちて、花を翳しの袂より、潜る燕の可愛らし、
見飽かぬ空を行く雁の、誰がまつちやら向越し、憎い心ぢやないかいな

其の昔ありしも恋の手引草、誓も深き奥山に根ごして植し初桜、色香を送る春風に、
馬道越して通ふ駕籠、三枚四枚衣紋坂、早や大門と夕桜、気高き花の粧ひに、松の位の
そとはちもんじ 外八文字、実に此の里の春の宵、桂男の俤も、霞める空の朧月

はつこひ 初恋の花もの言はぬ習しに、思ひざしなる武蔵野も、誰が手にふれし盃の影にこぼるる
あいけう 愛嬌は、いとしらしさの花紅葉、濃いも薄いもこき交せて、寿海猿若とりどりに、はやす
はおり 羽織の曲舞は、君が笑顔の半開と、心の駒や勇むらん

おもしろ 面白や花の友垣ひと群に、眺つきせぬ春遊び、尚いつまでも長唄の、道の栄を祝しけり